介護老人保健施設ライフサポートねりま

症　例　概　要　利用者:　80歳代　男性　要介護4

病　　名:　くも膜下出血術後　両側前頭葉損傷

利用ｻｰﾋﾞｽ:　入所

経　　過:令和3年9月に浴槽内で意識障害を呈し救急搬送された。前大脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血の診断にて開頭クリッピング術施行。翌月にはVPシャント術施行。その後回復期病棟へ入院された。その翌年3月に発熱が持続、シャント感染疑いにてVPシャント抜去されている。その後、口から食事を摂ることができず、経鼻経管栄養での生活を余儀なくされたが、約1年間の経管栄養生活を離脱され、令和6年2月にADL向上とリハビリ目的でライフサポートねりまへ入所された。

内　　容

1年間の経管栄養生活を終え、入所時のBMIは15.7であった。経口摂取ができるようになったが、嚥下状態が悪く、水分はトロミが必要な状態であった。前頭葉障害による自発性の低下が顕著に認められており、食事を自身で摂ることもできず、何事にも促しが必要であった。

ご本人は「家に帰りたい」と、しっかりとした意志を示していました。ご自宅に帰るために多職種で意見交換をし、食事を自分でとれるようにする。自主トレを欠かさず行う。トイレ動作自立を獲得する。全てにおいて声かけを行い、根気強く関わっていきました。

成果として、セッティングを行えば、整容や食事が自身でできるようになっていった。栄養状態の改善とともに介助量軽減を認め、トイレ動作は1人介助にて可能となった。

ご本人は寡黙な方で口数は少ない方でしたが、趣味の話などをすると喜んで話をされ、入所当時と比べ明るい表情をされていた。促しにより、黙々と自主トレを行った成果で、支持物がある状態での立位保持が安定し、トイレ動作での協力動作が得られるようになった。入所時からの変化に称賛の声をかけると、「にやり」と少し照れくさそうに笑う姿が印象的であった。

入所から3ヶ月経過した頃には、食べることに意欲的になり、ご家族からの差し入れを喜んで食べている姿が度々見られていた。BMIも18.3と飛躍的に向上し、栄養面、身体面共に改善がみられ、制動付きの前腕支持型歩行器を使用し、軽介助にて連続80m歩行が可能となった。

多職種での声掛けや積極的な促しにより、入所当初と比較し、ADL向上し、表情も明るくなった事例であった。